

LGBT 当事者の心理的支援のためのインテリアデザインの構築

Construction of Interior Design for Psychological Support of LGBT

松田 奈緒子 (MATSUDA Naoko)

我が国においても LGBT に対する“容認や理解“の傾向は日増しに強まっている。しかし、芸術やデザインの世界においてすら未だ、根深い偏見や中傷に曝らされているのが実情である。(LGBT：レズ、ゲイ、バイセクショナル、トランスジェンダーの略)

かつて、インテリアの調査を通じて、そこに住む人の自己や心の有り様がインテリア空間に表出していることを見出した。それを読み解くことで、インテリア空間が人の自我や精神・行動と極めて深く関わりを持っていることに注目した。

本研究では、LGBT 当事者の自己とそのインテリア空間との関係性を明らかにすることを目的とする。自己はインテリア空間に投影されるが、逆にそのインテリア空間に自己は影響されることから、最終的には、インテリア空間を構築・デザインすることにより、LGBT 当事者の心理的支援・回復策を考案していくことを目指している。

ここでは特に、多様な性を考慮したインテリア意識調査の試みについて報告する。一般のアンケート調査等では性別を男女の 2 択とするケースが未だ多く、またそうした調査の結果も、2 者の傾向で示される場合がほとんどである。そのため、LGBT 当事者の意識や実態が明らかになる機会は少なく、誤ったイメージや偏見が解消されない一因となっていると考えられる。

昨今では LGBT 当事者をテーマにした TV ドラマや映画等も多い。その中には当事者の住まうインテリア空間を、そのキャラクターに相応しく入念に設定しているものもあれば、当事者に対するステレオタイプな解釈を含むものもあるだろう。そのため、時には TV ドラマ等を通して視聴者に間違った認識を与えることも懸念される。

そこで、LGBT 当事者が自身の住まうインテリア空間に対しどのような色や雰囲気を楽しむのか等、彼らの意識を探るため WEB アンケート調査を行った。その際の性別選択肢を「女性」「男性」「その他」「わからない／回答したくない」（以降、「不明」と表記）の 4 分類とした。

その結果、「その他」はインテリアの色に「白」を選ぶ傾向が見られた。またインテリアの雰囲気として、固定されない様々なスタイルを取り入れている様子が窺えた。「不明」は、性別を答えたくない人というよりは、質問自体に答えたくない人であることが回答内容から示唆された。中には偏見を疑わせる回答も垣間見られた。

今後は、TV ドラマで描かれたインテリア空間を分析したり、インタビュー調査を実施する等、研究対象を広げていきたい。なお、研究成果の一部は、「多様な性を考慮したインテリア意識調査の試み」(日本インテリア学会第 32 回大会研究発表梗概集、pp.63-64、2020 年 10 月)にとりまとめている。